

令和6年度
平和大使長崎派遣事業報告書

争いのない世界へ

未来を担う私たちが

「平和」という橋をかけよう

松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使の役割	3
平和大使長崎派遣募集要項	4
平和大使名簿	7
平和大使長崎派遣行程	8
平和大使長崎派遣帰庁報告会	17
平和の集い	18
平和大使の報告	
「長崎派遣を通して感じたこと」	山室 ^{やまむろ} 里花 ^{りか} 21
「平和な生活を送り続けるために」	鈴木 ^{すずき} 瑠那 ^{るな} 25
「長崎に行って学んだこと」	梶本 ^{かじもと} 大智 ^{たいち} 31
「今、そして、これから」	岩渕 ^{いわぶち} 蒼生 ^{あおい} 37
「長崎に行って」	鈴木 ^{すずき} 美羽 ^{みわ} 41
「長崎派遣を終えて」	角本 ^{すみもと} 唯 ^{ゆい} 45
「平和を知ること、考えること」	木村 ^{きむら} 花音 ^{かのん} 49
「長崎へ行って」	戸邊 ^{とべ} 杏佳 ^{ももか} 55
「長崎へ行き変わった心」	吉岡 ^{よしおか} 心結 ^{みゆ} 59
「長崎派遣を終えて」	山口 ^{やまぐち} そよ香 ^か 63
「戦争について知るということ」	中坂 ^{なかさか} 恒太 ^{こうた} 67
「長崎で学んだこと」	稗方 ^{ひえかた} 結人 ^{ゆいと} 71
「平和大使で感じたこと」	三宮 ^{さんぐう} 春馬 ^{はるま} 75
「長崎を訪れて」	山田 ^{やまだ} 彩羽 ^{いろは} 79
「長崎派遣を終えて」	武井 ^{たけい} 優衣 ^{ゆい} 83
「長崎派遣で私を感じたこと」	根古 ^{ねふる} 紫央 ^{しお} 87

「1秒の威力と大切さ」	かわみつ 川満	えいる 英琉	．．．．．	91
「平和大使長崎派遣を終えて」	まつもと 松本	そら 想来	．．．．．	95
「長崎派遣を終えて」	おおたに 大谷	りな 莉愛	．．．．．	101
「長崎派遣で学んだこと」	よしざわ 吉澤	かずま 一真	．．．．．	103
「長崎を最後の被爆地にする為に」	むらせ 村瀬	れなみ 麗奈美	．．．．．	107
「城山小学校で学んだこと」	ほんだ 本田	あやか 彩佳	．．．．．	111
派遣後の活動について	．．．．．	．．．．．	．．．．．	115
長崎平和宣言（令和6年8月9日）	．．．．．	．．．．．	．．．．．	121
歴代平和大使名簿	．．．．．	．．．．．	．．．．．	129



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、「世界平和都市」を宣言して以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでいただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第15回目を数え、延べ306名の平和大使を派遣しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆79周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典には100の国と地域の代表と、約2,300人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから、核兵器廃絶を求め声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、核戦争が勃発すると、人命のみならず地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまうことから、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」であることを訴えました。また、国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができると呼びかけました。

被爆者の平均年齢は85歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一步ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

・ World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the “World Peace City”.

City of Matsudo

・ 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、

建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使の役割 ～

- 1 松戸市世界平和都市宣言を知る。
- 2 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して長崎に献呈する。
- 4 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業 第15回「平和大使長崎派遣」大使募集要項



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で毎年開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

・ 「平和大使」は、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて研修や長崎派遣を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

・ 市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある事前研修、派遣、事後研修全てに参加できる人。
※既に平和大使として長崎へ派遣された方は、対象となりません。

【 定員 】

・ 原則各学校1名とし、全学校で22名（申込者が定員を超える場合は抽選とします。）

【 費用 】

- ・ 市の負担 松戸市から長崎市までの往復交通運賃、宿泊費、長崎市内移動バス電車運賃
8/7(水)の夕食、8/8(木)～9(金)の3食、8/10(土)の朝食・昼食
- ・ 自己負担 事前研修等にかかる会場(市内)までの交通費、8/7(水)の昼食 など

【 申込方法 】

・ 参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

【 提出期限 】

・ 令和6年5月31日(金)までに学校へ提出

【 研修日程 】

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

7月7日(日) 10:00~12:00 結団式及び第1回オリエンテーション
 青少年ピースフォーラム等の内容説明
 7月28日(日) 10:00~15:00 第2回オリエンテーション
 戦争、原爆、平和についての自主学習

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(水)~8月10日(土) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

< 青少年ピースフォーラム >

8月9日(金)の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。



過去の青少年ピースフォーラム
 ※現地開催の様子

(4) 「平和大使長崎派遣」 日程表(仮)

8/7(水)	松戸市役所 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル(自主学習)	
8/8(木)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 < 場所: 原爆落下中心地公園、城山小学校など >
	14:00~15:15	開会行事(被爆体験講話など) < 場所: 平和会館ホール >
8/9(金)	15:25~18:00	参加型平和学習(屋内) < 場所: 平和会館ホール > こぢんまりフィールドワーク(屋外) < 場所: 原爆資料館周辺 >
	午前	平和祈念式典への参列 < 場所: 平和公園または中継会場 出島メッセ長崎 >
8/10(土)	14:00~16:00	参加型平和学習(屋内) < 場所: 出島メッセ長崎または長崎ブリックホール >
	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散	

(5) 同行者 松戸市職員4名、添乗員1名

3 事後研修

8月28日(水) 平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出

派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

11月下旬(予定)「平和の集い」へ参加し、報告会を行います。

～ 平和大使名簿 ～

やまむろ 山室	りか 里花	(第一中学校 1学年)
すずき 鈴木	るな 瑠那	(第二中学校 3学年)
かじもと 梶本	たいち 大智	(第三中学校 1学年)
いわぶち 岩渕	あおい 蒼生	(第四中学校 1学年)
すずき 鈴木	みわ 美羽	(第四中学校 2学年)
すみもと 角本	ゆい 唯	(第五中学校 1学年)
きむら 木村	かのん 花音	(第六中学校 1学年)
とべ 戸邊	ももか 杏佳	(小金中学校 2学年)
よしおか 吉岡	みゆ 心結	(常盤平中学校 1学年)
やまくち 山口	そよ ^か 香	(栗ヶ沢中学校 1学年)
なかさか 中坂	こうた 恒太	(六実中学校 2学年)
ひえかた 稗方	ゆいと 結人	(小金南中学校 1学年)
さんぐう 三宮	はるま 春馬	(古ヶ崎中学校 1学年)
やまだ 山田	いろは 彩羽	(牧野原中学校 2学年)
たけい 武井	ゆい 優衣	(河原塚中学校 2学年)
ねふる 根古	しお 紫央	(根木内中学校 1学年)
かわみつ 川満	えいる 英琉	(新松戸南中学校 2学年)
まつもと 松本	そら 想来	(金ヶ作中学校 1学年)
おおたに 大谷	りな 莉愛	(和名ヶ谷中学校 3学年)
よしざわ 吉澤	かずま 一真	(光英VERITAS中学校 2学年)
むらせ 村瀬	れな ^み 麗奈美	(光英VERITAS中学校 2学年)
ほんだ 本田	あやか 彩佳	(専修大学松戸中学校 1学年)

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月7日（日）

◆結団式・第1回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

結団式では各学校から選ばれた平和大使に任命証が交付されました。

オリエンテーションでは、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。また、事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受け、先輩大使に貴重な体験談を話していただきました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉



〈先輩大使の体験談〉

7月28日(日)

◆第2回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

長崎派遣に向けて、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を決め、コミュニケーションを図りました。

午後は2つのグループに分かれ、グループワークを行いました。「争いの原因」と「争いをなくすためにはどうしたらよいのか」をそれぞれに考え、意見交換をしました。そして、グループごとに意見を集約し発表をしました。

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るため、大使たちが折った鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を平和への願いを込めて一つひとつ糸でつないでいきました。

そして、千羽鶴に添える標語をみんなで話し合っ

て、「争いのない世界へ 未来を担う私たちが「平和」という橋をかけよう」に決定しました。



〈役割決めの様子〉



〈グループワーク〉



〈グループ発表〉



〈千羽鶴の作製〉

8月7日（水）

◆9：40 長崎市へ出発

松戸市役所に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られてバスで羽田空港に向かいました。12時55分に羽田空港を出発し、14時40分に長崎空港到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、16時頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16：20 長崎県防空本部跡(立山防空壕)見学

16時20分にホテルを出発し、立山防空壕見学へ向かいました。

壕内には当時この場所にいた方の証言や当時の電報が記載されたパネルや、ここで発見された原物資料が展示されており、原爆投下直後の混乱の様子が伺えます。その後は日本三名橋に数えられている眼鏡橋を見学し、ホテルに戻りました。



〈長崎県防空本部跡地（立山防空壕）〉



〈眼鏡橋〉

8月8日（木）

◆9：00 被爆建造物見学

朝8時30分にホテルを出発し、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約2時間かけて歩いて巡りました。平和案内人の方が、当時の悲惨な様子をわかりやすく説明してくれました。実際に被爆建造物を自分の目で見ることで、被害がどれほどのものだったのか伝わってきました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈被爆当時の地層〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈平和の鐘（平和公園）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉

◆12：30 千羽鶴献呈〔長崎原爆資料館〕

大使と松戸市民の思いをのせた3つの千羽鶴を長崎原爆資料館に献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉



〈松戸市の千羽鶴〉

◆12：40 自由学習〔長崎原爆資料館〕

千羽鶴を献呈した後、原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の実物大模型や原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。



〈長崎原爆資料館〉

◆14：00 青少年ピースフォーラム(開会行事)参加〔長崎市平和会館〕

青少年ピースフォーラムには、全国から小・中・高校生等が参加しました。

開会行事では、青少年ピースボランティアによる開会宣言、長崎市長挨拶の後、長崎原爆の被爆者である松尾 幸子さんから被爆体験講話を聞きました。



〈被爆体験講話〉

◆15：15 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加〔長崎市平和会館〕

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループに分かれて、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークを行った後に、スライド学習や戦争模擬体験を行い、被爆の実相を学びました。

また、令和6年9月28日(土)に長崎市で行われる『平和の^{ともしび}灯』で灯されるキャンドルに平和を願いながら絵付けを行い、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈フィールドワーク〉



〈戦争模擬体験〉



〈キャンドル絵付け〉

8月9日（金）

◆10：45 平和祈念式典参列〔平和公園・出島メッセ長崎〕

「被爆79周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝9時にホテルを出発し、大使たちは2会場（平和公園、出島メッセ長崎）に分かれて、それぞれ緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆投下時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆79周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時45分 開式
- 46分 原爆死没者名奉安
- 48分 式辞（長崎市議会議長）
- 52分 献水
- 54分 献花
- 11時02分 黙とう
- 03分 長崎平和宣言（長崎市長）
- 12分 平和への誓い
- 19分 児童合唱
- 24分 来賓挨拶
- 40分 合唱 千羽鶴
- 45分 閉式



〈平和公園〉



〈平和公園での黙とうの様子〉



〈出島メッセ長崎での献花の様子〉

◆14:00 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加〔出島メッセ長崎〕

午後は、前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「ケンカ・戦争の原因は何だろう？」をテーマに意見を出し合い、「ケンカや戦争をなくすには、どうしたらよいか」話し合いを深めました。そして各々が「My 平和宣言」を作りました。

2日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と活発な意見交換と交流ができ、大変貴重な体験となりました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈My 平和宣言〉



〈参加者集合写真〉

◆17:40 自由学習（大浦天主堂、グラバー園見学）

青少年ピースフォーラムを終え、大浦天主堂、グラバー園を散策しました。グラバー園から見た長崎市の景色は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈大浦天主堂下〉



〈グラバー園〉

8月10日(土)

◆8:50 松戸市へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。
11時10分に長崎空港を出発し、長崎を後にしました。移動中、各々が帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時55分羽田空港到着。市の迎いのバスで、市役所へ向かいました。



〈ホテル〉

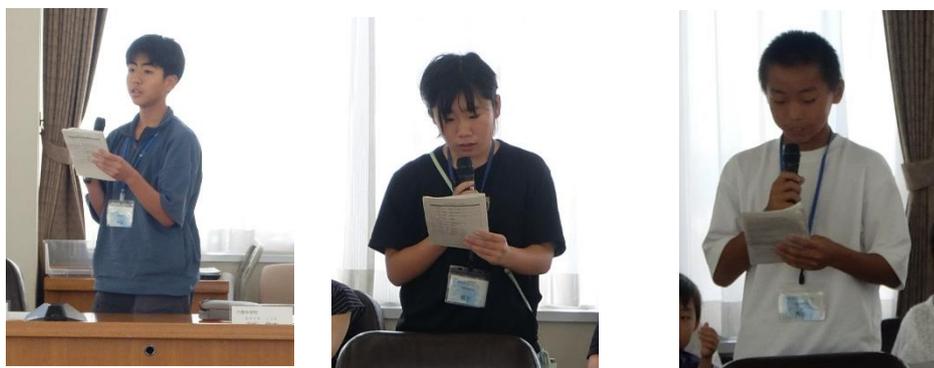
～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆14：50 松戸市役所到着

松戸市役所に到着。

◆15：15 帰庁報告会〔市役所新館7階大会議室〕

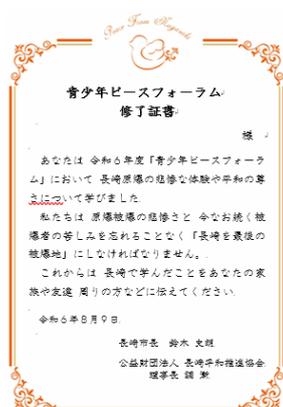
副市長や議長、教育長、出迎えてくれた家族に、長崎市で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して感じた平和への思いなどを一人ひとり報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告会の様子〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉



〈修了証書〉



〈YouTube 動画 平和大使長崎派遣 帰庁報告会〉



動画QRコード

～ 平和の集い ～

11月24日（日）

◆13：10 平和大使長崎派遣報告会〔市民劇場〕

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたこと、今後の決意を伝えました。



今年で戦後79年を迎えました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなっています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎市で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていく活動をしていきます。

平和大使の報告

長崎派遣を通して感じたこと

松戸市立第一中学校 1年

山室 里花

私は長崎派遣を通して戦争のおろかさや、
ひさんさを学びました。

一日目、私達は長崎の町並みなど見学しま
した。路面電車も初めて見ましたが、町の人
達が沢山利用していてとても賑やかでした。
本当にここで戦争があったのかと思えるほど
きれいな町並みでした。二日目は戦争の跡地
をカイドさんに案内してもらいました。今、
私達はそこを列になつて歩いているけれど、
その時は死体が地面にころがっていて、それ
をふみながら歩くことを考えるととても悲し
くなりました。その後はピースフォーラムで
被爆体験講話などを聞きました。被爆を身を
持って体験された方の話は、テレビでみるも
のとは少しちがっていて、ふだんは聞けない
ような細かい所までも聞けて、とても勉強に
なりました。話をうかがう中でも、とても心に

20 × 20

残ったのは「長崎を最後の被爆地に」という言葉です。原爆をドカドカ落とすのはそう難しくありませんが、今作られてしまった原子爆弾達を安全に処理し、誰も使わないようにするのはとても難しいことです。それを私達がこの目で見てきたことをいかに世界中に原爆のおそろしさを伝えるのはあなた達なんだと言っているまうでした。三日目はついに式典の日でした。全国各地どころか全世界から人が集まっていた、規模が大きいなと思いました。式典の最中では市長が力強く話をされていて私もこんなふうに長崎のおそろしさをみんなに伝えられればと思いました。二日目のピースフォーラムでは戦争やケンカの起こる原因、解決策を話しあいました。起こる原因は「うばいあい」や「自分勝手」など、大体同じような意見でした。ですが、解決策では「認めあう」や「やられたらやり返す」など、正反対の意見もたくさん出てきて、戦争を解決することは、そう簡単ではないんだと

感じました。

今回の長崎派遣を通して、私は戦争のおろかさ、ひさんさを学びました。自分や家族や友達がそのような目にあ、てしなうと考えると、ただおそろしいです。長崎を最後の被爆地にするために、小さな私達一人一人が力を合わせていくことを意識していきたいです。

平和な生活を送り続けるために

松戸市立第二中学校 3年

鈴木 瑠那

昭和20年8月6日午前8時15分に広島へ、8月9日午前11時2分には長崎へ原子爆弾が投下されました。私は原子爆弾が投下された長崎で戦争や平和について深く学ぶことを目的に8月7日から10日までの4日間平和大使として長崎へ派遣されました。

私は4日間の派遣の中で特に印象に残った出来事が二つあります。

一つ目は2日目に行った原爆資料館です。原爆資料館には目をそむけたくなるような写真や展示物がたくさんありました。黒焦げの焼死体や駅のホームで亡くなっている母子、背中が焼けたばかりで背中一面が真っ赤な血で染まった男の子などの写真があり、あまりの悲慘さに言葉を失いました。また、11時2分をさしたままの時計、とけて変形したサイダー瓶や折れ曲がった火の見やぐら、ガラス

20×20

がたたくさん突き刺さった作業衣ほどからも当時の被害の大きさがうかがえました。一発の原子爆弾によって日常が壊され、大切な人や胸が消え去ってしまった悲しめは私には想像してもしきれません。

二つ目は青少年ピースフォーラムでの活動です。青少年ピースフォーラムでは被爆した方のお話を聞いたり、戦時下の生活を疑似体験したりしました。被爆体験講話では被爆当時11歳だった松尾幸子さんが長崎に原爆が落とされた時のことをお話ししてくださいました。松尾さんのお話の中で心に残った言葉があります。それは「愚かな戦争はもう二度としないでください。一日も早く核兵器を無くしてください。」という言葉です。私は実際に被爆した方の強い思いに心が動かされました。現在世界には12000発以上の核があるといわれています。12000発以上の核を全て無くす、ということはいかに難しいかもしれないけど核を使わないようにするための行動

20 × 20

は私にもできるのではないかと、思いました。戦争疑似体験では戦時中の生活を実際に体験しているような気持ちになりました。大切な人や物、場所を15枚ほどのカードに一つずつ書いていきます。そして徴兵制や外出制限などで戦況が悪化するにつれて書いたカードを手放します。自分の大好きな人や物を書いたカードを手放したときはとても胸が痛めました。私はたくさんカードを持っていたのですが、最後には全て無くなってしまいました。戦争疑似体験では音や照明を使って当時の様子を再現します。実際に戦争が起こっているわけではない、ということには理解しているのに、空襲警報の音、原子爆弾が落ちた時の強い光や大きな音によって恐怖を感じました。私は戦争疑似体験を通して「戦争の怖さ」を知ってからもう二度と戦争なんて起こしてはいけない、体験したくないと思いました。

多くの方が亡くなった中、奇跡的に生き残った方も後遺症によって苦しんだと聞いて私

は驚きました。生き残った方は放射線の影響で脱毛や白血病などの原爆症に苦しみました。生き残っても苦しめ続けなければいけないなんてとても残酷だなと思いました。また、被爆者の方は病気だけでなく周りの人からの根拠のない差別や偏見にも苦しんだそうです。原子爆弾は体だけでなく人の心にも大きな傷を与えたと知り、改めて原子爆弾の恐ろしさを感じました。

長崎派遣を通して私はもう二度と核兵器を使ってはいけないと強く思いました。核兵器を使わないためには私が長崎で学んできたことを多くの人に伝えて、核兵器の恐ろしさを知ってもらうことが一番大切だと思います。また、私は長崎に行く前、毎日が同じような日々でおもしろくないなと思いつきが時折ありました。しかし長崎へ行ってから、心が平和だからこそそう思ってしまったと気づきました。平和は当たり前ではありません。今自分が置かれている環境に感謝しながら生

活していきたいと思いました。

今も世界のさまざまな地域で争いが起こっています。争いを無くすために一人一人が世界中の人を思いやることが大切です。もし何か問題が起きたときは武力ではなく、話し合いで解決することができれば平和へと繋がると思います。また、世界で唯一の被爆国である日本はもっと核兵器の恐ろしさを学び、戦争の悲惨さを、愚かさを世界に発信していく必要があると思います。被爆者の方の経験が無駄にならないように、悲しい思いをする人が世界でいなくなるように、と願っています。

私は長崎を最後の被爆地にするために、原子爆弾の恐ろしさを平和大使として次の世代へこれから語り継いでいきます。

長崎に行って学んだこと

松戸市立第三中学校 1年

梶本 大智

僕が長崎に行こうと思った理由は2つあり
ました。一つ目は、小学6年生の社会の授業
で習った戦争と原爆の事を、もっと詳しく知
りたいと思ったからです。二つ目は、被爆者
の高齢化が進み直接話を聞くことが難しくな
ってきているため、僕達若者がその思いを受
け継ぎ、次世代へ戦争や核の脅威を伝えてい
かなければならないと思ったからです。平和
大使に選ばれたからには、次世代へ伝えられ
る知識を持つため、気を引き締めて活動に臨
みました。

僕がこの四日間で一番印象に残ったのは、
被爆模擬体験です。自分の大切な人や物をカ
ードに書き、戦争が悪化するとともにカード
は次々と無くなっていき、僕の手元のカード
はとうとう自分一人になってしまいました。
僕の中では、物がなく友達や家族のいない生

活など考えられません。戦時中の人々は毎日こんな不自由な暮らしをしているのかと思うと、胸がとてとても苦しくなりました。また、空襲警報のサイレンを1回聞くだけでもドキッとしたのに、それが1日何度も鳴ると思うと、ものすごく恐怖を感じました。ちょうどこの体験時に、緊急地震速報のアラームが一斉に鳴り、家族と離れているとこんなにも怖いのに、毎日ビクビクして暮らすのは心が折れそうだと思いました。

次に被爆体験講話が心に残りました。今、当たり前のようにある食料や水が、戦時中は簡単に手に入らないと聞いて、とても驚きました。また、被爆者の松尾さんの家族が7人も亡くなったと聞いて、僕たちたり生きるのが辛くて自殺してしまいそうだと思いました。松尾さんは講話の最後に核兵器廃絶、二度と戦争をしないこと、核や戦争の恐ろしさを沢山の人に伝えてほしい、これが私の願いですとおっしゃいました。僕は松尾さんの3つの

願いを多くの人に伝えて、もっともっと先の世代へと繋げなければいけないと強く思いました。

三番目に心に残ったのは原爆資料館です。そこには被害のすごさが分かる展示物が、数多くありました。その中でも一番驚いたのは山王神社の一本柱鳥居です。見た時それが何か全くわかりませんでした。鳥居だとわかると、なぜあんなに丈夫な建物が倒れるのか、謎が出てきました。爆風が秒速440メートルと聞き、台風の時よりもはるかに強く想像が難しかったのですが、その風により鳥居が倒れたことがやっと理解できました。次に見たのは溶けたら本の瓶です。熱線の温度はお風呂の温度の約100倍の4000℃と知り、瓶も一瞬に溶かす熱さに驚きました。

実際に行った場所では、旧城山国民学校が一番印象的でした。原爆により一瞬にして、生徒1500人中1400人が亡くなったこともすごかったけれど、そんな中でガラスが

背中に刺さっても子どもを必死に守る先生がいたことを知り、涙が出そうになりました。今、学校に楽しく行けて友達や先生に会えるのは、当たり前じゃない事に初めて気付きました。これからは学んでいることにも感謝の気持ちをもって学校に行こうと思いました。

僕はこの四日間で「怖い・悲しい・恐ろしい」という気持ちに何度もなりました。長崎に行く前も戦争や核兵器が「恐ろしい」という知識はありましたが、実際の被害や体験がここまで恐ろしいとは思っていませんでした。さらには生き残っても大けかを負い、それだけではなく放射線の影響で差別を受けている人がいるということを知りませんでした。こんな経験は誰にもしてほしくありません。

では、世界中の人が戦争や核兵器で「怖い・悲しい・恐ろしい」思いをせずにはすむにはどうしたらいいのでしょうか。最後に、全国の中学生と共に意見交換をし、争いを避けるための「マイ平和宣言」を考えました。「相手

の気持ちも考え、互いの意見を尊重し合い、
自分の間違いは素直に認め、謝ることを目指
すこと」この日の宣言を胸に刻みたいと思ひ
ます。

僕は長崎で学びたくさんの「怖い・悲しい・
恐ろしい」事実を知りました。それを再び繰
り返さないためにも、この情報をできるだけ
たくさんの人に発信し、戦争や核の脅威を知
ってもらうことが大切だ”と思います。今、自
分ができることを精一杯することで、戦争や
核のない未来はきっとくることを信じていた
です。

今、そして、これから

松戸市立第四中学校 1年

岩渕 蒼生

「広島を1番目の被爆地、長崎を2番目の被爆地、ではなく、唯一の被爆国である日本が、広島を最初の被爆地、長崎を最後の被爆地にしなければならない。」

平和案内人のこの言葉の意味を理解するのに、そう時間はかからなかった。

1日目、長崎空港を降り立ち、目に飛び込んできたのは、青い空の下、緑豊かな街並みだった。しかし、その美しい風景の裏には、想像を絶する悲劇があったとは思えなかった。

2日目、平和案内人さんのガイドの中、原爆落下中心地を見学し、その近くの小学校では、原爆により児童1400人が亡くなったと聴き、心が突き動かされました。その後、青少年ホースフォーラムで、原爆の恐ろしさが改めて突きつけられた。大量破壊、大量殺戮が瞬時にかつ無差別に引き起こされ、放射

線による障害がその後も長期間に渡り人々を苦しめ、今もなお、深い傷跡を残している。

3日目、被爆79周年長崎原爆犠牲慰霊平和祈念式典に参加するという、貴重な経験をすることができた。長崎市鈴木市長、被爆者代表（三瀬清一郎さん）の話聴き、原爆の被害を二度と繰り返してはいけなないものだと感じた。

現在、世界中では、中東情勢、ウクライナの紛争など、多くの争いが絶えない。その原因は、どれも価値観の違いから来るものと感じている。他者を認め、他者の意見を受け入れる勇気を持つことが大切だと感じた。

身近な人との争いが無くなるように、もしかしたら戦争は無くなるかもしれない。

また、私達の住む日本は核兵器を保有していないが、アメリカの持つ核兵器のおかげで、他の核保有国への抑止になっている。このまま核の傘の下にいては核兵器が無くなる

かもしれない。

しかし、核兵器を使わせない。日本を唯一の被爆国にすることは、これからの私達の活動次第なのではないか？

具体的に何かが出来るとは言いませんが、今、当たり前のように、学校に行き、学び、友人と他愛のない会話をします。そんな日常が、一瞬にして奪われてしまう原爆の恐ろしさ、戦争の恐ろしさを、また戦争から復興した長崎の人々の力強さも伝えていくことが、これからの私達ができることである。

松戸市の皆さん、このような貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。

長崎に行つて

松戸市立第四中学校 2年

鈴木 美羽

長崎への派遣を通じて、私は戦争の悲惨さと平和の尊さについて深く考えることができました。原爆資料館などで学べたこと、平和祈念式典で感じたことなど報告します。

長崎原爆資料館では、1945年8月9日に投下された原子爆弾がどれだけ大きな被害をもたらしたのか知る事ができました。館内には、被爆者の遺品、写真などが展示されていました。それを見て、私は戦争がどれほど、罪のない人々を苦しませたのか。と深く感じました。特に、心に残ったのは、原子爆弾を実際に受けた人が書いた手紙です。そこには、家族を失った悲しみと、それでも平和を願う強い思いが書かれていました。

青少年ピースフォーラムでは、戦争はなぜ起こるのか。けんかはなぜ起こるのかなど、いろいろな人と話し合う事ができました。

平和祈念式典では、長崎の人たちと一緒に平和を願いました。式典では、被爆者の方々が自分の体験を語る場面があり、その言葉が私の心に深く響きました。「二度と同じ過ちを繰り返してはならない」という言葉は、私たちが心に刻むべき大切な教えだと感じました。途中で行われたもくとうの時間は、平和という大切さを考えられた時間でした。

長崎での経験を通じて、私は平和を守るためには戦争に対する一人ひとりの考えや、思いが大切だと思いました。若い世代が一人でも多く戦争に対する思いを改める事で、平和を願う人々がもっと多くなると思います。そして、この平和事業に参加した私たちが、まなだのことを周りの人に伝えることが重要だと思っています。こうした取り組みを増やすことで、みんなの平和に対する思いがもっと良くなると思います。この作文が、少しでも多くの人に平和への思いを強くするきっかけとなる

20 × 20

ればうれしいです。平和への思いを胸に、行動を起こすことで、より平和で豊かな未来を築くことができますと信じています。

長崎派遣を終えて

松戸市立第五中学校 1年

角本 唯

令和6年8月7日から10日まで「平和大使」として長崎へ行き、ご参りました。

私が「平和大使長崎派遣」に申し込んだ理由は、広島へ帰省した時に、原爆ドームや平和記念資料館へ行き、たことがあ、たのでもう一つの原爆が投下された長崎を自分の目で見て家族や友達に伝えたいと思、たからです。

7月7日の結団式と2回のオリエンテーションを通して、戦争を実際に体験した方々からお話を聞き、学びを深めたいと長崎派遣へ臨みました。

一日目は、立山防空壕へ行きました。長官室、参謀長室、参謀室、通信室、伝令室があり大平洋戦争中に長崎県防空本部が置かれ県知事による警備、救護救援、応急対応に関する連絡手配や指揮がここで行われていました。

二日目は、平和案内人による被爆建造物か

イトで原爆落下中心地、城山小学校、平和公園へ行きました。城山小学校とは爆心地から500メートルのところにあり、も、とも爆心地に近い学校で児童1,500人のうち原爆により一瞬にして1,400人が亡くなりましたそうです。次に原爆資料館に行き平和大使の役割の一つであり、平和への願いを込めてオリエンテーションで作製した千羽鶴を献呈しました。資料館では、長崎の街が一瞬にして破壊されたことを語る11時2分を指して止ま、柱時計や浦上天主堂の惨状を見て原爆の破壊力に恐怖を感じました。高度9,600メートルの高さで投下された原爆により地表面温度は、3,000~4,000度になり熱線でびんが溶けて変形したり、弁当箱の中のお米はその後の火災で炭化し黒こけになり、ていました。午後は青少年ピースフォーラムに参加し、実際に被爆した方のお話を聞きました。戦争中は、当たり前のように空襲警報のサイレンが鳴、ていて、食事は配給制

でお腹い、はい食べることができなかつたそ
うです。当時は、そのような状況で常に不安
や恐怖を抱き感情がまひしていたと思います。

三日目は、出島メッセに行き献花をした後
に平和祈念式典の様子を中継で見ました。原
爆死没者名奏安、長崎市長による長崎平和宣
言、被爆者代表の平和への誓いを聞きました。

私が今回三泊四日の長崎派遣に参加して学
んだことは「戦争の怖さ」と「命の尊さ」で
す。何不自由なく暮らせる平和な時代の日本
に生まれ、戦争を知らない世代が8割になった
一方で現在でも2つの戦争が起こるといいます。
戦争の原因は、国や民族間の意見、考え方の
食い違いく文化的な問題です。

これまで歩んできた人類の歴史を省りみて他
国の文化や人の考えを受け入れ自分の中で理
解することが大切だと感じました。

戦後79年がたち戦争や原爆の怖さを忘れ
かけている今、戦争を風化させないために長
崎派遣で経験したことを家族や友達に伝えて

いきます。そして戦争や核兵器のない平和な
世界をつくりたいです。

平和を知ること、考えること

松戸市立第六中学校 1年

木村 花音

現在、被爆者の平均年齢は85歳を起えており、年々戦争を経験した方々の数は減っています。わたし自身の両親や祖父母も戦争を経験しておらず、小学校の教科書で戦争について習っても、遠い昔のことで、想像しづらいというのが本音でした。そんな中、『赤毛のアン』の翻訳者である村岡花子さんの本や、『魔女の宅急便』の作者である角野栄子さんの『トンネルの森1945』などの本を通して、大切な人と引き裂かれる戦争のむごさを少しずつ想像するようになっていました。戦争を実際に体験された方の言葉を直接聞ける機会がない中、今回長崎の平和大使に参加させていただけたことは、わたしにとって戦争、そして原子爆弾投下という凄惨な歴史を、被爆者の方や、地元のピースボランティアの高校生の方々からも直接学ぶことの

20 × 20

できた、ありがたい機会となりました。

防空壕の中を見学させていただいたとき、空襲のサイレンが鳴るたび、このような場所へ走って逃げ、それでも入口の向きなどで爆風のために助からないこともあると聞き、ショックを受けました。当たり前だが戦争において市民は何も安全が保障されず、身一つでとても心もとない存在であると感じました。

平和会館ホールの中で私たちは被爆体験というものに参加しました。自分にとって大切な人、場所、物などをカードに記入し、段階的に手元にあつたカードは次々と無くなっていきます。最初の空襲では電気を失い、携帯電話や冷房が使えなくなりました。次の空襲では、図書館や遊園地、カフェや公園などのお気に入りの場所を失いました。さらに徴兵制度が始まり、父や兄などの家族は戦地へ旅立ちます。そして次の空襲で、そばにいてくれた母や姉や妹が亡くなりました。最後に長い長い原子爆弾投下音の中、全てが無くな

てしま、たのです。最後の、感^カ覚^カとしての感^カ情^カを表すと、絶^{ケツ}望^{ボウ}でした。暑^{ナツ}い中^{ナツ}エア^エコン^コや扇^セ風^{フウ}機^キもなく、水^{ミヅ}や食^シ糧^{リョウ}もない。自由^{ジユウ}な遊^{アソ}び^ビや学^{マナ}び^ビもない。家^イ族^{ザク}も亡^{ナシ}く^ナって頼^{タノ}れる人^{ヒト}もいない。今^{イマ}の私^{ワタシ}の普^ツ段^{ダン}の暮^クら^シが、ど^ドれ^レだ^ダけ幸^{サイ}せ^カを感^カじ^タ時^{トキ}間^{カン}で^シた。

長^{ナガ}崎^{サキ}で特^{トク}に印^{イン}象^{ゾウ}的^{テキ}だ^ッ。た^タこ^コは、被^ヘ爆^{バク}者^{シャ}で^シある松^{マツ}尾^{オノ}幸^{サチ}子^コさん^ノのお話^{ワタシ}を聞^キか^セて^イた^ダい^タ時^{トキ}間^{カン}で^シた。松^{マツ}尾^{オノ}さん^ノは原^{ハラ}爆^{バク}が落^オと^サれ^タと^キ、お母^{オノ}さん^ノと弟^{ケイ}た^チと街^{マチ}から離^ハれ^タ山^{ヤマ}に^イた^ソう^デす。山^{ヤマ}の中^{ナカ}の畑^{ハタチ}でサ^サツ^ツマイ^{マイ}モ^モや^ヤじ^{ジャ}が^ガい^イも^モを^ヲ育^{イク}て^イた^ノで、そ^ソれ^ヲを^ヲ収^シ穫^クし、暑^{ナツ}い^ノで小^コ屋^ヤに^イり、洋^{オウ}服^{フク}を^ヲ脱^ダぎ、持^チ出^デし^テいた^ト鞆^{トモ}の中^{ナカ}を^ヲ見^ミた^{トキ}、白^{シロ}い^ヒ光^ヒが^ヲ周^{シユウ}り^ヲを^ヲ包^ツみ、次^{ツギ}の^{トキ}瞬^{マユ}間^{カン}に^ハ爆^{バク}風^{フウ}で^ハ飛^トば^サれ、気^キづ^クい^タ時^{トキ}に^ハ地^チ面^{メン}の^上に^立っ^テい^タと^イい^マす。幸^{サチ}子^コさん^ノは幸^{サイ}い^ニ無^ム傷^ケで^シた^ガ、お母^{オノ}さん^ノは目^メの^上に^ハ大^オき^ナな^ケ傷^ケを^ヲ負^オい、弟^{ケイ}の^背中^{ナカ}に^ハ大^オき^ナな^ケ傷^ケが^アり^マし^タ。お父^{オノ}さん^ノは町^{マチ}の^工場^{バウ}に^イて^働い^テい^マし^タが、被^ヘ爆^{バク}し^テお^リ、血^チだ^らけ^ノの^ケ状^{ゾウ}態^{タイ}

で再会し、家族で命のあることを喜び合いましたが、放射線の影響で8月28日には息を引き取ったといえます。姉や兄二人、叔母二人と兄嫁も、原爆で亡くなったと聞きました。

松尾さんは、時折遠くを見つめながら、とても辛かったはずの記憶を一生懸命に細かくお話くださり、そして最後にこうおっしゃいました。

「愚かな戦争はやめてください。核兵器を世界からなくしてください。」

と心のこもった強い声で言っておられました。爆風で飛ばされた人、熱線により体が焼けただれた人、放射線により長く苦しんで亡くなった人。そしてやっどの思いで生き残っても、傷跡の影響で身体検査に引っ掛かり就職出来ず、働けず経済的に困窮した人や、悩んで自殺した人。原爆症がいつでるかもわからない不安で精神的に苦しんだ人たち。そんな次から次へとめまぐるしく続いてきた苦悩を、ご本人から直接聞かせていただいたこと

は、私にとって一生忘れてはならない、しっかりと聞き、伝えていくべきお話だと気持ちを引き締まる思いでした。

私たちは戦争を体験していないので、戦争はおろか、被爆者の方々の苦しみや辛さを本当の意味で知ることはできないでしょう。けれども、お話をしてくださった方、伝えてくださる方はなぜこんなに一生懸命に私たちに平和を訴えてくださるのか。そこでは何が起こっていたのか。知って考えて、想像することはできます。戦争をしないためには、互いの気持ちを否定しないことも重要だと思いました。今、目の前にあるささやかな自分の周りの平和に感謝する気持ちを忘れず、この先も学び、考えて、争いの不毛さを伝えていける人間になりたいと思いました。

長崎へ行つて

小金中学校 2年

戸邊 杏佳

昭和20年8月9日午前11時2分。長崎に1つの原子爆弾が落とされました。辺り一面、明るい光に照らされ、それと同時に、爆風、熱線、方射線が長崎市を包み一瞬にして多くの人の命をうばい、人の心に傷をつけました。

長崎に落とされた原子爆弾「フットマン」は上空約500メートルで爆発しました。爆発したとき、落下中心地付近では約3000度～4000度の高温となりました。

原子爆弾がほかの爆弾と異なる点は、放射線の放出でした。爆心地から1km以内で被爆された方のうち、無傷であっても大多数の人が死亡しています。被爆から79年たった今も放射線の影響で、白血病・甲状腺がん・乳がん・大腸がんなどの病気を発症して多くの人々に影響を及ぼしています。

平和案内人の方が案内して下さい、た「城山

国民小学校」は爆心地から500メートルほどしか離れていなかったため、学校内にいた職員や学校で仕事されていた方々が130人以上死亡しました。また、自宅にいた児童約1500人中、約1400人が死亡しました。当時、保健室にいた児童とその児童をだ、こしていた1人の先生がいました。その先生は窓ガラスに背を向けていたため、爆風にふり窓ガラスが割れたときに、その先生の背中には何百ものガラスの破片がささってしまっただけです。その状況を見ていたわけでもないのに、そのことを想像するだけでとても心が痛くなりました。

青少年ピースフォーラムでは、松尾幸子さんの被爆体験講話を聞きました。幸子さんは爆心地から約1.3km離れた場所にいたため、無傷でしたが弟が負傷、父・兄2人・姉・叔母2人が死亡しました。当時、幸子さんが住んでいた家は爆心地から約0.7km地点にあり、家にいた姉が骨が見つかったそうです。同じよ

うな体験をされた方も多くいます。だから、もっと多くの人に戦争について興味をもってほしいと思っています。

現在、世界には約2000もの核兵器が存在し、その中で現役として使えるのは約9500だと言われています。今の技術では、広島や長崎に落された原爆よりさらに威力が高まっています。もし、使われてしまったら、何万だけでなく、何十万、何百万もの犠牲者が出ると考えられます。そのため、使われないように戦争ではなく、もっと話し合ってもらいたいのです。

被爆者体験講話や長崎平和祈念式典で何度も耳にした「長崎は二度目の被爆地ではなく最後の被爆地にしたい」という言葉を聞いて、思ったことがあります。一人はとても小さな力かもしれませんが、です。一人が色々な人に伝えていき、何十人もの仲間ができれば大きな力になります。だから、まだこれから先が長い学生や大人が大きな力となり、全力で核兵器廃絶を訴えていけば、やがて平和な未

来を築くことにつながっていくと思います。
今ある平和に感謝しながら、これから過ごして
いきたいです。

長崎へ行き変わり、た心

常盤平中学校 1年

吉岡 心結

私は、中学1年生の夏に長崎を訪ねました。6月の上旬という事もあり日差がとこもきつかったです。長崎という土地柄、坂道が多く今でこそきれいな街並ですが、今から約79年前に原子爆弾が落とされた多くの人の命が奪われました。

長崎へ行き「平和」とは何かと戦争の「悲惨さ」を学びました。平和語り部の方は、自分自身で体験した辛い思い出を教えてくださいました。そのお話では、体験しないと分からない想像もできないほど悲惨なことばかりでした。青少年ピースフォーラムでは、原爆の疑似体験をしました。大切な物や人がどんどん無くなっていくことがとても恐ろしかったです。こんな事が現実に起こるとは想像もつきません。城山国民学校には、原爆に耐えながら残った建物、丸焦げの骨組みなどの戦

20 × 20

争の悲惨さが伝わってくる物が残されていま
した。

長崎原爆資料館では、爆風でコンクリートが
おれた浦上天主堂の惨状や長崎に落された原
爆「ファットマン」の模型や原爆が落とされ
た後の様子が写っている写真などがありここ
にいるだけで、少しがっ悲しくなっているま
した。長崎の原爆では、爆風の被害が明く爆
心地から1キロメートル以内では、家屋が殆
どに破壊されました。この爆風で人々は吹き
飛ばされ散弾のようながラスや木片を全身に
あび放射線による被害では、人の身体に入り
細胞を壊します。身体の外への被害が無くと
も放射線によつて七くなつた人が明くいます。

これからの私達は、未来を「平和」にでき
るように考えなければいけません。今
ある核の数は、12、120発です。これを
ゼロにするのは難しいですが減らすことはで
きるはずです。たく工人の人々の大切な命が
無くならないように「戦争」という言葉を、

世界から無くせるように心かけをけるといいと
思いました。

長崎派遣を終えて

栗ヶ沢中学校 1年

山口 るよ香

私は、平和大使長崎派遣を通して、戦争と核兵器の恐ろしさ、平和の尊さ、被爆者の思い苦しめ、悲しみを学びました。

1945年8月9日11時2分長崎に原爆が投下されました。

なぜ原爆が投下されたのでしょうか。

原爆が投下された理由として長崎は、空襲の被害をあまり受けておらず、原爆の威力や効果を確かめやすかったこと、三菱造船所をはじめとする兵器工場や、造船場が、長崎に集まっていたことなどが、原爆投下地に選ばれた理由です。

原爆の威力は、私達が想像しているものよりはるかに恐ろしいものであり、甚大な被害をもたらし、強烈な熱線と凄まじい爆風が一瞬にして、美しい街と人々の命を奪いました。その中の被害者は、14万8千7百9十3人

20 × 20

の被害が出ました。そのうちの死者は、7万3千8百84人で重軽傷者は、7万4千9百9人の被害が出ました。

原爆は、放射線による被害をもたらしました。放射線により、人体に、深刻な障害を及ぼしました。放射線は、細胞を破壊し、血液を変質させました。こんな残酷なことを体験した人は、こんなに苦しく、悲しかったかを想像するだけで心が痛みました。

今、世界で核兵器を保有している数は、2024年6月時点長崎大学核兵器廃絶研究センターによると、全世界で、1万2千120発もの核兵器を持っていることがわかります。その中で、核兵器を1番保有している国は、ロシアとアメリカで、もしもロシアとアメリカが対立してしまったり、地球が破壊されてしまい、何もかもが無くなってしまおうと思いましたが。

同じ人間がこんなにも恐ろしい兵器を発明し一人でも多くの人を殺せば勝利となることに

矛盾を感じ、あまりの恐ろしさに言葉を失いました。

被爆士小た、松尾幸子さんは、このように話していました。「これから私達ができることは核兵器の怖さ、恐ろしさを伝え、一人一人が核は反対と伝えて、平和を、戦争は二度としないぞ。」と皆んなに伝えていました。

私も、幸子さんから学んだことを、身の回りの人に伝えていかなければならない。そしてこれからは、「おろかな戦争をしない。」ということ。そのためには、まず、相手の考えを尊重すること。自己中心的な考えをやめることもこれから、少しずつ一人一人が努力すること、この世界が少しずついい方向に行くのではないかと思います。

現在の主な戦争や紛争は、アフガニスタン紛争、ウクライナ侵攻です。こんな戦争をして国民や関係の無い人達が巻き込まれているといったことが、現在でも起きています。

そんなのは、理不尽すぎると思いました。

なぜかというと、平気で人を何千何万人もの人を殺しているからです。

戦争ではなく、「対話」という方法があるにも関わらず、このように戦争をすることは、人としての心がなく、やさしさがなく思いやりが無いと思い、とても残酷だと感じました。

戦争は、全てを打ちし、人の心を変えたり、人に対して思いやりをもてなくなります。そして、ひどい言葉や、暴力、自己中心的な態度をとるようになり、人の心を打ちせます。私は、戦争を終わらせるためにまず、自分ができることから始め、自分の中にある争いをやめ、人との接し方や、たとえ意見が違っても、話すときの態度を変えられることが出来ます。私達の1回(回)の良い選択が世界をより良くできるということを更に強く感じました。そして、私達1人1人は、選択と行いによって平和を作り出す人になると信じています。

戦争について知ること

松戸市立六実中学校 2年

中坂 恒太

僕は、この平和大使長崎派遣を通して、さまざまなことを経験し、学んできました。

まず、あなたは原爆というものについての程度知っていますか？ 1945年、8月9日の11時2分、長崎に落とされた1発の爆弾により、7万5000人が亡くなり、7万5000人が重軽傷を負いました。爆心地からおよそ500メートルのところにあり、城山国民学校では、児童1500人のうち、1400人が亡くなったといわれています。当時の長崎市の人口は約25万人であったことから、被害の大きさがうかがえます。また、原爆が落とされた後も、放射線の影響が甚しくなるといわれるや、差別や偏見に苦しんでいる方もいます。原爆は、被爆直後だけでなく、一生残り苦しみをもたらす兵器です。

僕はこの長崎派遣で印象に残り、この子と
かっあります。

しっ日は、被爆体験講話でうわ、た話で
す。原爆が投下されたとき、あ子女性はこの
ように言、こいたえうです。

「なぜ私が苦しまなければならぬのわ」
この言葉は今でもは、きりと覚えています。
また、自分のせいで友人を亡くしてしま、た
と後悔してこの方も多くい子えうです。悪い
のは自分ではないのに、あの時の行動は一生
罪として記憶に残るのです。ことも理不尽で
あり、恐ろしいと深く感じました。

この日は、私たちがも、と原爆だけではなく、
戦争について知り、考える必要があると感じ
たことです。なぜこのように考えるかには、
しつ理由があります。

これは青少年センターフォーラムという、全
国から中学生などが集まり、平和について学
びイベントで、戦争について詳しく知り、こい
子とや、話かてま子人かいなか、たからです。

例えば、ケンカはなぜ起こるのか、なくすためにはどうしたらいいのかについてはおか子人が多く、たものの、戦争というテーマに変わるとおか子人がとちも少なくな。といて、い意見があまり出てきませんでした。なぜ、戦争というテーマになりただけで、このように変わる、としまうのか、僕は疑問に感じていました。

そして、戦争について知ることばかりがないため、戦争の意見をいせなれ、たのどはないかと気づきました。戦争について話し合う前に、戦争の背景や歴史を知ることが、第一歩なのではないかと思ひます。正解や答えがあるものではないかもしれませんが、しれし、知ることなければ、正解や答えに近づくことはできません。僕の考えとして、戦争は表面的な綺麗事のみで解決できるものではないと思ひます。戦争が良くないことはたれでも知ることと思ひますが、戦争自体を知ることしな限り、なくすためにどうしたらいいか

を考えることができないということを知りました。そして、戦争への関心が薄れてくる状況ほど、戦争が再び起こりやすいのではないかと心配になりました。

現在、日本は戦後80年を経ようとしています。日本は戦争をしていないですが、戦争の記憶が薄れつつあり、世界では戦争が起こり、再び世界中が戦火に巻き込まれてもおかしくない状況です。僕は、長崎で体験して、全国の同年代の人たちと話し、交流して戦争の悲惨さ、平和の尊さを多く学びました。それらを他の人たちにも考えてもらえるよう、これからはより一層、僕も平和と戦争について知り、考える努力をしていきたいです。

長崎で学んだこと

小金南中学校 1年

稗方 結人

僕は3泊4日の平和大使長崎派遣の活動の中で、長崎原爆資料館や城山小学校等を訪問し、また青少年ピースフォーラムや長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。この経験の中で一番印象に残っているのは、戦争疑似体験です。

戦争疑似体験では、手元に自分たちの大切なものを書いたカードを用意し、開戦、徴兵、空爆と戦争が進むたびにそのカードを失うという戦争の恐ろしさや悲惨さを体験する活動に参加しました。自分の大切なものが人かどんどんと奪われていくのはとても怖くてつらいことでした。

また、長崎原爆資料館で見た原爆の影響で壊れたものやけがをした人の資料は、どれも見るだけで胸が痛くなり、原爆の恐ろしさや分かるものばかりでした。原爆によるろく〜

四千度ともしあれる高熱によ、て、表面が溶
かされ沸騰したところが触れた時、この熱を
体に浴びた人はどれほど苦しか、ただろうか
と想像すると、筆がしがたい思いで胸がい、
ぱいになりました。

今回の長崎派遣を通して、戦争というもの
は単に「恐ろしい」とか「悲しい」といった
ものではなく、今自分たちが手にしているもの
のすべて奪い、大切なものを何一つとして
残さないものなのだ実感しました。また原
子力爆弾というものは、他国への軍事抑止力
として所持するには、あまりにも悲惨な結末
を導く危険なものであり、世界平和を遠ざけ
るものであると感じました。

平和祈念式典の中で長崎の鈴木史朗市長も
引用していた、福田須磨子さんの詩の中にも
あるように、現在も世界中にある1万2千発
もの核兵器が0にな、た時こそ

そこ初めて 真の平和が生まれ

人間は人間として蘇るよとができるので

といえるのだと思います。

今回の経験を通して僕が学んだことは自分の心の中に留めるのではなく、人に発信し継承することによって意味を成すのだでしょう。戦争や原爆は自国を守るものではなく、我々の生活を奪うものだと知ってほしい、平和を奪われた後どのような日々をおくるのか一人一人が想像してみしてほしいと自分の家族や友人に伝えていくことが僕の務めであると考えます。

平和大使で感じたこと

松戸市立古ヶ崎中学校 一年

三宮 春馬

僕は派遣される当日、いろいろなことで不安でした。うまく人となじめるか、忘れ物をしていないかなどのごことで心がいっぱいでした。市役所についてしばらくすると、出発式が始まりました。出発式が終わると、AとB別のバスに乗り空港に向かいました。空港につき、お昼を食べて、飛行機に乗りました。

長崎を飛行機から見ると、とてもきれいで自然が大切にされてると感じました。長崎について最初に感じたのは、空気がおいしくて心地よいなあと感じました。長崎ならではの自然や、空気、景色などがあると思いつくつくしてきました。本当にこんなきれいな場所に原子爆弾が落ちたのが、とも感じました。駅に着き、立山防空壕に向かうと中、美しい建物があり、とても気になりながらも、防空壕に入りました。防空壕の中はトンネルのよ

うなところもあれば、地下室のようなところもありました。少し不気味で、怖いと言っている人もいました。中には通信室や伝令室などがありません。

「ここは昔県知事の人とかのえらい人がいるところで、一般の人はもってせまいよ。」

と、教えてくれました。中には死傷者の方の数や、証言などがボードに記されていました。防空壕を出たあと、人々が亡くなるようすが目に浮かびました。とても胸が苦しくなり、少し吐き気がして、胃がむかむかしました。

二日目は、原爆落下中心地公園からガイドさんと500m先にある城山国民学校に向かいました。途中、築橋という、見ただけではなんの変哲もない橋で少し止まりました。実は、そこ一面、川が埋まるくらい、人が倒れていて亡くなっていたそうなのです。被爆直後、表面温度は4000度にも達していてとても熱く、服がドロドロに溶けていて、今に

も倒れそうな中、水を求めて川で水を浴びた直後、亡くなっていたようで、その上にも水を求めた人が亡くなり、埋まっていたようです。話が終わると、また歩き出しました。そうすると、皆が黙り、考えていました。爆風や熱線を浴び、さらには放射線が飛来してきた物が体に刺さり痛みを感じて亡くなっていたということが城山小学校には、記されていました。ガイドさんによると核は、たった1秒で今歩いてきた道のりまで爆風が届くそうです。それを聞き核はとてと脅威的かつ残酷で残忍な兵器なのだと再認識しました。

城山国民学校跡には平和に関する詩や、模型などがありました。その中で最も心に残ったのは乾布摩擦をする子どもの絵と、女の人が多い学校です。1つ目は、夜は寒く、葉などがいないため実施されたそうです。2つ目は、男子は兵器工場に行、てしまったためだそうです。女性の方もかなりいたそうです。不安定な生活が求められていたことを知り、心に

きました。

午後は長崎原爆資料館に行き、様々な資料を見ました。例えば、「プロジェクションマッピング」による立体的な地図や、ファットマンという投下された原爆の模型や、歪な形になったガラスびん、十一時二分で止まった時計などがありました。一番衝撃的だったのは、背中が赤く焼けただれた少年の一枚の写真でした。熱線で焼かれた体はとて傷つき、骨のような物が飛びでていました。次に平和会館ホールへ向かい座りながら被爆体験講話を聞き感じたことは、原爆が人をここまで苦しめるのかと思いました。家族や友達や家などが失われることがあることを学びました。

フィールドワークでは、こんなにも人々が七くな、たんだなと言う事を自分の足を使って感じました。戦争はだれも得をせず、何も生まないと言う事を一層感じました。一人一人が協力し、平和への道を開いていきました。

長崎を訪れて

牧野原中学校 2年

山田 彩羽

今回、私は長崎県に行き最初に見た光景は私たると変わらぬ日常を送っている人たると綺麗な街並みです。その時の第一印象はこのように綺麗な街に79年前、原子爆弾が投下されたとは想像することができませんでした。

そして、原爆資料館での見学では目を伏せたくなるほど悲惨な写真や熱線の影響によりビーンが溶け、人の手とくっ付いている実物を見て、原子爆弾の威力や恐ろしさが伝わってきました。それは出発前の想像を遙かに上回るものでした。

二日目の被爆体験講話で松尾さんがおっしゃっていた「長崎を最後の被爆地に」という言葉がとて印象に残っています。

また、「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」では、長崎市長の鈴木さんの長崎平和宣言や被爆者代表の三瀬さんの平和への誓いを聞

いて、戦争や核兵器は二度と使ってはいけない
いと思いました。それと同時に去年も一昨年
も、その前もこれまでずっと戦争や核兵器の
恐ろしさを訴え、平和を求め続けているのに
世界では今もまだ争いをしている国や核兵器
を保有している国があることに虚しさや違和
感を感じました。

戦争や争いが起こる原因や無くすためには
どうしたらよいかを青少年ポスターフォーラム
で話し合いました。そして色々な意見が出た
中で、争いの原因は領土の取り合いやお互い
を理解し合えていないこと、経済を回すため
などが出ました。それには、相手の意見や考
えにも耳を傾けることの大切さにも気づけま
した。

平和な世界にするのはそう簡単ではないの
かもしれないけど世界のどこかでおきている
小さな争いが少しでも減ることによって戦争のない
平和な世界に近づくと感じました。

今回、色々なことを学べて当たり前の生活

があることはとても幸せだ"ということに改めて
知ることができました。このことをきっかけに
今ある日常を大切にしていき、勉強ができて
いることなどにもしっかりと感謝してい
きたいです。これから人は死ぬ理由が戦争
や核兵器ではないように、私たちが周りの人
たちに伝えていき、思いやりをもち、これか
らも生活していきたいと思います。

長崎派遣を終えて

河原塚中学校 2年

武井 優衣

私は長崎派遣を終え、様々なことを学び体験しました。1945年8月9日11時2分長崎の綺麗で美しい街が1発の原子爆弾によって日常が一瞬にして奪われました。そして残ったのは悲しみの涙や絶望の声だと感じました。死者は約7万4千人、重軽傷者は約7万人と被害者がでました。城山国民学校(小学校)では児童1万5千人のうち死者は1万4千人と、尊い生命を奪われたのが原爆です。原爆の特徴として三つのエネルギーを使用したのが原爆です。三つのエネルギーとは「放射線」「熱線」「爆風」です。放射線を浴びた直後には全身の脱力と吐き気に襲われます。約2か月後には白血球、赤血球など血液細胞が作られなくなります。そして熱線の熱さは約3千度～4千度と言われています。鉄が浴びる熱さは千度なので千度の熱を人が浴びると

20×20

一瞬にして溶けてしまいます。最後に爆風です。爆風は鉄筋コンクリートを粉々にしてしまいます。それだけではなく人や物など簡単に吹き飛ばしてしまうほどの力を持っています。この三つを組み合わせたのが核兵器です。そして今世界では二つの戦争をしています。また核兵器は7万2千発と廃絶には程遠いのが現状です。ですが核兵器は今もなお進化を続けています。このままだと再び核兵器を使う日は必ず来ると思います。もしたら心の傷や家族や友人、大切な人を亡くする人も増え差別や生涯にわたる被爆者は増えていくばかりです。これは79年前から守られてきている重要な規範が失われるかもという危機的状態に直面しているところです。私は長崎に行く前と今では考え方が変わりました。なぜなら79年前は私たちの祖父母が体験しているかもしれませぬ。今の私たちたちがう所は、戦時中か戦後かというだけですが。79年前も幸せな日常があり、大切な人や物、場所もありまし

20×20

た。希望に溢れている日々を奪われた怒りや
絶望、悲しみなどの気持ちには被爆者にしかわ
かりません。たとえ私が被爆者だとしても乗
り越えられる自信は無いです。ですが体験し
てほしくない、人に伝えたいという気持ちを
私は強く持ちました。これは人それぞれです
が話し伝えたい人もいれば、話したくも思
い出たくなかない人もいます。私はそれで
も良いと思いました。人に伝えたい人の言葉
に耳を傾けて、聞いたことや感じたことを家
族や友人に話してあげれば時間はかかるけれども
戦争への意識も高め、平和に向けて努力がで
きると長崎を訪れ感じました。

長崎派遣で私が感じたこと

根木内中学校 1年

根古 繁央

私は3泊4日の長崎派遣で感じたことは大きく分けて3つあります。

一つ目は核兵器の恐ろしきことです。原爆は上空500mで爆発しました。そのときの表面温度は3000度〜4000度に達しました。太陽の温度が6000度なので地球に太陽が思ひ。きり近づいたようなものなのです。そんな原爆が爆発すればとけて無くな、てしまう人もいれ尋常にはないやけどを負う人もいます。さらには爆風も秒速400mという速さで高温の風がふくので、爆風でとばされてしまい、建物にぶつか、てせな、てしまう人もいます。原爆落下時のデータでは死者・重軽傷者いずれも約7万4千人に被害がありました。また、生きていられたとしても原爆によ、て出た放射線により、病気にかかり、周りからは差別や偏見をもたれ心身ともに弱。

20×20

ていく人が多かったそうです。私はこのよ
うな体験を二度とおこさないようにしたいと強
く感じました。

二つ目は、戦争の辛さです。私は青少年ピ
ースフォーラムで戦争のぎじ体験を行いました。
空襲のような音がなると、ものすご
いきょうかにおそわれました。このような音
を毎日聞いていると思うとこわくてたまりま
せんでした。また、ぎじ体験が始まる前に大
切なものや、人、場所をカードに書くの
ですが、体験をするとなにもかもがうばわれ
てしまい、どんどん日常がうばわれ
てしまい、ぎじ体験が終わるところには私の
きえにあ、たたくせんのカードは全
てなくなりました。今の当り前
がなくなくなると辛くてたまりません。
私は、戦争は絶対におこしてはいけ
ないものだと思われため感じました。

三つ目は今の世界のげんじょう
についてです。日本は唯一の被爆国
であり、苦しい思い

もしたと言うのにもかわらず、世界からは核兵器はおりません。今、ロシアやウクライナなどが戦争をしていますがいつ原爆が落とされても、おかしくない状態です。長崎派遣中に何度も聞いた言葉は「広島が1回目、長崎が2回目ではなく、広島が最初で長崎が最後」という言葉をききました。この言葉は世界中に届けた方がいいと思いました。

このことをかまえて私は、長崎派遣での経験を多くの人に伝え、世界中が平和になるように、私達が立ち向かっています。このように感じました。同じ地球に住んでいるなら、全員が平和になっほしいと多くの人から願えるようにしていきたいです。

1秒の威力と大切さ

新松戸南中学校 2年

川満 英琉

「1秒」そう聞いて現代の人はどう思うだろうか。おそらく、何でもなかったの一瞬と思うであろう。しかし、1945年午前1時2分まで生きていた人たちにとっては原爆が落ちた後の1秒は人生の中で最も残酷な1秒であったと私は考える。なぜなら、長崎派遣二日目に平和案内人の方からこのような言葉を頂いたからである。「爆風の速さは秒速約440メートルで、飛行機が一秒間に進む距離の二倍進めるんだよ。」初めこの言葉を聞いたときは想像があまりつかなかった。その後、私達は平和案内人と一緒に実際に500メートルほど(校庭のトラック2周半)歩いた。時間にして10分くらいだったが、8月の長崎は非常に蒸し暑く、たくさんの汗をかいた。しかし爆風は、自分達が苦勞して歩いたこの500メートルをたったの1秒で

20 × 20

進むのだと聞かされ、実感が湧いたとともに、爆風のスピードがとてもとて速いものだとわかった。私は、たとえ遠く離れた場所で原爆が炸裂したとしても絶対に爆風からは逃げきれないと思った。この爆風を耐え抜いた人は幸せになれたのだろうか。幸せにな、てほしかったが、現実にはそうはいかなかったようだ。青少年ピースフォーラムの一日目で、仮に生き残ったとしても被爆者だからという理由で根拠のない差別をされ、最終的には自殺に追い込まれた人もいたと聞いた。原爆が落とされて生き残ったとしてもその後の生活は苦しいものだったとわかり、私は胸が痛くな、た。

「学校」それは教育を受ける場所である。しかし、長崎に原爆が投下された次の日から、学校は地獄へと変わり、体育館では負傷者や今にも死にそうな人を治療し、校庭では穴を掘って死体を処理していたという。私はその様子を頭に思い浮かべるだけで恐怖を覚え

た。

ここまで書いてきたことのように、現代では想像のつかないことばかりである。しかし原爆投下の悲惨さを昔のことだからといって、風化させ忘れ去ってはならない。この長崎派遣という貴重な経験で得た学びをもとに、一人に一つしかない尊い命が再び奪われることがないように、まずは自分自身が今回の長崎派遣で学んだことを決して忘れず、1秒1秒を大切に生きていきたい。最後に、このような機会をくださりありがとうございました。

平和大使長崎派遣を終えて

松戸市立金ヶ作中学校 1年

松本 想来

僕たちは8月7日～8月10日の3泊4日で長崎に平和大使として行き、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさや平和の尊さを学んできました。その中で、平和祈念式典の参列や青少年ピースフォーラムに参加したり、ということも長崎でおこなってきました。

まず1日目は、長崎の町並みを見て、長崎の様子を見ました。たてもものはそこまで松戸と変わらない様子でしたが、路面電車が走っていたり、土地の高低差が激しかったりと、松戸にはないものが見られました。

その後、立山防空壕に見学に行きました。立山防空壕は、想像よりもその後に見た防空壕よりもはるかに大きくて、防空監視隊や伝令室などの部屋がありました。また、出入口がたくさんありました。要員は、空襲警報が発令されると、立山防空壕に集まり、警備や

救護等に当たっていたそうです。

その後は、眼鏡橋や周辺を見学しました。路面電車で長崎を町を見ながら、宿泊する長崎オリオンホテルに向かい、宿泊しました。

2日目は、まず平和案内人さんに被爆建造物を案内してもらいました。城山小学校などに見学しました。そこでは、たくさんの方が犠牲になり、約1500人いた児童のうち約1400人が亡くなってしまったことが分かりました。それを聞いてあらためて原爆の恐ろしさを実感しました。城山小学校にはたくさんの方の防空壕が見られました。城山小学校に生えていたカラスガンショウの木は、かろうじて生き残ったものの、かけてしまったりしていました。それを見て、台風よりもはるかに強い爆風が吹いたことが分かりました。

平和公園前の和泉屋さんで昼食を取ったあと、原爆資料館を見学しました。そこには、原爆に関する資料がのっていました。長崎型原爆ファットマンの模型などがあり、1m5

2cmの大きさがあることにおどろきました。それだから大きな被害になってしまったのだなと思いました。

その後、青少年ピースフォーラムに参加しました。まず被爆体験講話を聞きました。話してくださった松尾幸子さんは、11歳で被爆し、本人は無傷だったがものの家族を8人なくしてしまいました。松尾さんや被爆者たちは今なお放射線により苦しんでいます。原爆は、光が見えたあとに強い音がなり、とばされたそうです。松尾さんは、おろかな戦争を二度としないでください、核兵器を世界からなくしてくださいと強く心から願いをこめておっしゃっていました。僕もそれが大切だと思いつつ聞いていました。とてもためになる話でした。

その後、平和祈念館と原爆中心地周辺に行きました。平和祈念館では、セくなってしまった人の数のライトがある水ばんや、原爆投下からの日数が表示されていたり、2023年の

8月9日までに原爆により亡くなってしまった人が195607人いることが書かれました。残酷だなと思いました。

その後、戦争の体験をする学習がありました。地震があったこともあり、より気がひきしまつて取り組みました。どんどん大切な物や人を失ってしまうのがつらかったです。

その後、平和のキャンドル絵付けを行いました。

バスでホテルに向かい、夕食を食べました。ナポリタンが特においしかったです。

3日目の午前中に平和公園で祈念式典に参加しました。原爆投下時刻の午前11時2分に黙とうしました。その後長崎平和宣言を聞き、平和への誓い、合唱を聞きました。核兵器を使用させないための強い願いが感じられました。「平和をつくる人々よ！一人ひとりは微力であっても、無力ではありません。」その言葉が印象に残りました。

昼食をとり、青少年ピースフォーラムに参

加しました。3日目はケンカや戦争をなくすためにはどうすればよいかを考えました。僕たち11班は、ケンカをなくすためにどうすればよいか考えました。僕は、意見のちがいからケンカが生まれると思ひ、なくすためには相手の意見もしっかり聞くことが大切だと考えました。記念さつえいをしたあと、解散しました。

お土産を購入し、グラバー園と大浦天主堂を見学しました。

ホテルに帰り、夕食を食べて寝ました。

4日目は、ほぼすぐに帰り、15時ほどに市役所につきました。

僕は、この4日間の学習をとおして、原爆により亡くなられた人は73884人で、おろかな戦争を二度としてはいけない、長崎を最後の被爆地にしなければならないということが大きいです。そのために、世界に1万発以上ある核をなくすために、いろいろな人に今回学んだことをしっかりと伝えたいです。

長崎派遣を終えて

和名ヶ谷中学校 3年

大谷莉愛

私は今まで原爆の恐ろしさを母から言われても分らなかった。昔の話よりハレスチナの人口が毎日爆撃で死んで行くニュースのほうが私には、つらいことでした。

そんな私に母が長崎平和大使派遣の話します。実は母も中学の時に船橋市から長崎平和大使に選ばれて参加したようです。その時のことをよく私に話しました。時には目に涙をためて。じゃあ私も行ってみたいかと初めは軽い気持ちで参加しました。

行って初めて初めて分かりました。母がなぜ涙目で話し、また怒りを込めた強い言葉で原爆の恐ろしさを語るのか。

1945年8月6日広島に原爆投下。
9日、長崎に2発目を投下。長崎市だけで15万人の人口が死傷しました。一瞬で人間が蒸発してしまう地獄の業火。生き残っても皮

20×20

膚をけつくし、水も飲めない、死んでも名前が誰かも分からない、家族も全員死んでしま、たかもしれない、恐怖、考えても考えても考えをほるかに越える考えられない状態。言葉に出来ることは到底でなない。

母の話がいつも辛く悲しくそして怒りがある理由がわかりました。

原爆を使用すれば人類は全滅するのにな。

わか、これでも原爆を無くとうとしな世界。そんな世界かを知りたいけれど私には原爆を無くすことはでなない。私も母のように誰かに伝えて生きたい。

長崎平和大使派遣事業は来年も再来年も続けて下さい。みんなに、このことを伝えて。

長崎派遣で学んだこと

光英VERITAS中学校 2年

吉澤 一真

私が平和大使長崎派遣で学んだ事は三つあります。

まず一つ目に学んだ事は、「原爆をはじめとする核兵器の恐ろしきことについてです。原爆の熱風は建物などに被害をあたらし、とても恐ろしいものであると知りました。原爆資料館では、放射能が人体に与える被害というものを学び、また原爆が与えた被害は健康面だけではなく、その後の差別など被爆者と名乗るだけでいじめられることもあったと聞きました。被爆者に対するいじめや差別はあってはならないことであり、その原因は原爆です。原爆は人を殺し、生き残っても後遺症やいじめなどで苦しめてしまう非常に残虐なる兵器であることを学びました。

二つ目に学んだ事は、「決して諦めてはいけない」ということです。原爆が落とされた

後、長崎は今後70年は草木が生えないと言われたそうです。しかし、現在の長崎は草木も生え、復興していています。そして昨年訪れた広島も同様に復興していています。それを見て私は当時の方が諦めず努力をしておたからだと思います。努力を続ける事は重要な事だと感じました。私は原爆や戦争の話も聞き、色々な人に諦めず努力を続ける事は大事であるという事を伝えようと思いました。

三つ目に学んが事は、「平和を学ぶ事」の大切さ、についてです。今世界では二つの地域で争いが発生していています。平和であるという事は当たり前の事ではありません。先程述べた二つの地域は私達の住む日本にとって遠い所ではありません。もしかしたら周辺地域の情勢次第で私達が当事者になる可能性もあります。そうならないことが一番よいのですが、もしそうなった時に気づかせるようでは遅いと思います。平和を学ぶ事により、改めて平和の大切さが分かり平和に近づくと感じ

まず、一言に平和を学ぶと言ってもいくつかの手段があります。例えば、戦争文学を読む事や戦争映画を見るなどたくさん手段があります。私には最もよい方法はわかりませんが、どのような手段であれ平和について学ぶことは無意味ではないと考えています。私達の平和を学ぶ姿勢が平和に近づいていくと思います。私は、原爆の恐ろしさと平和を学ぶ事の大切さを伝えていく必要があると思いました。

最後に私は、長崎で学んだ三つの事を様々な場所で伝えていきたいと思いました。

ー 長崎を最後の被爆地にする為にー

光英 V E R I T A S 中学校 2年

村瀬 麗奈美

今回の派遣で私は、今自分が家族と共に何事もなく暮らせていることがどれだけ幸せなことなのか、実感しました。

長崎に行つて特に私の心に残っているのは、原爆資料館で見た2つのものです。

一つ目は、泥山のがラスが刺まった跡のある服です。それは長崎県にある城山小学校で保健室の先生として働いていた女性が学校にいた間に被爆し、その時に彼女が着ていた服でした。その時爆風によつてがラスが割れ飛んで来て、彼女の背中には泥山のがラスの破片が突き刺さりました。当時は麻酔などの薬がなかった為、何も使わずに泥山のがラスの破片を一片一片抜いたと聞き、想像しただけでも鳥肌がたちました。

二つ目は、背中全体が剥き出しになり、ケロイドになった男の子が苦しそうにしている

20×20

写真です。私はその生々しく痛々しい姿を見るだけでも胸が痛か、たです。その隣には顔半分がケロイドにな、た方の写真もありました。一度被爆しただけで顔や体がこんなになっ、てしまっ、うんだ…。そう考えると、胸がゾクゾクとしました。

他にも体験して心に残、たことは沢山あります。その中の一つが、青年ピースフォーラムで体験した被爆体験です。空襲警報のサイレンが鳴り響く会場内が突然明るくな、た瞬間、大きな爆発音とともに会場内が真暗になりました。この体験ではどこかを痛めたり、苦しくな、たりしたわけではありませんでした。それでも、とても怖か、ったです。被爆者の方々は、辺りが急に真、暗になり、何か起こ、るのかわからな、い不安と、原爆が落ちてきた時の恐怖の中、大きな爆発音や熱風、熱線に襲われ、大きな傷を負い、その中には命を落としたりした方々も大勢いる…。それがどんなに苦し、いものかは、想像をはるかに超え

20 × 20

ていふと思ひます。それに、彼らは自分の大切なものを全てと言つても過言ではないほど、たった一つの原爆に奪はれました。だから私はこの体験を通して、実際どんな思ひは絶対にしたくない、これからは誰にもこの思ひをしてほしくないと、と思ひました。

また、同じ日に訪れた城山小学校では、当時15歳だ、木村嘉代子さんが、学徒出陣の為、城山小学校で働いてゐる間に原爆が投下され、たったの15歳にして命を断たれました。15歳と聞き、自分とそう離れた歳ではないのに毎日働いて苦勞し、それでも彼女の人生が原爆によつて奪はれてしまった。この子は未来を壊される為には生まれてきたわけではないのに...。その考へてみると、戦争の愚かさが身に染みてきました。その後、嘉代子さんの母によつて、嘉代子さんが大好きだ、木村の木がこの学校に植えられました。この桜は嘉代子桜と名付けられてゐるのですが、実はこの嘉代子桜は本来の桜の寿命を超えてゐるそうで

す。これには嘉代子さんはもちろん、沢山の被爆者から私達現代人への、「もう戦争なんかしないでください」「永遠に平和が続く世界にしてください」「そういう願いが込められてくるのでは無いでしょうか。

今私達日本人は戦争とかけ離れた、平和な暮らしをしていきます。でも約80年前は違いました。戦争によって毎日苦しい生活を強いられた。いつ空襲が来るかわからない事への恐怖を抱く毎日でした。そしてまたこれからの未来でそんな日々がやって来るかもしれない。今世界には9583個もの核兵器があり、これらの性能は1945年に落とされたものよりも確実に上がっています。しかも、今は世界で戦争や紛争が沢山起っており、世界情勢も日に日に悪化していき、これらの核兵器もいつどこに落とされてもおかしくない状況にあります。もう二度と同じ過ちを繰り返さない為、世界の全ての人々が、戦争と核の恐ろしさと同時にその愚かさを知る必要があると思います。

20×20

城山小学校で学んだこと

専修大学松戸中学校 1年

本田 彩佳

私は、この長崎平和大使派遣でたくさん
のことを学びました。特に印象に残っているこ
とは、城山小学校で学んだ2つのことです。

一つ目は、城山小学校の正面にある「平和
の像」です。「平和の像」とは、城山小学校
に通っていた1人の男の子をモデルにしてい
ます。その男の子は、た、た一発の原子爆弾
により家族を失くしてしまいます。そして男
の子は、毎日仏壇に向かいながら「平和」と
かいていたそうです。平和の像の下にある「
平和」という文字は、当時の字をそのまま彫
ったそうです。私はこの話をきいて、平和と
いうことは当たり前じゃないし、昔はいくら
願っても「平和」は一步も近づいて来ない、
むしろ遠ざかっていたようでした。話をきい
ているだけでもとても悲しかったです。

二つ目は、城山小学校の校庭にある「嘉代

20 × 20

子様」です。そこにはこんなエピソードがありました。原爆投下当日の8月9日の朝、嘉代子さんはこのようなことをお母さんに言っていました。「今日は仕事に行きたくない」。しかし、あと3日も経てば嘉代子さんの16歳の誕生日だ、たのび、お母さんはその日に休むことを提案します。嘉代子さんはお母さんの提案に同意し、職場である城山小学校に向かいました。しかし、いつも通り仕事ができたのは11時2分まででした。城山小学校は原爆投下中心地から500mと近く、1500人もいた生徒や先生のうち、1400人も亡くな、てしまいました。城山小学校はなぜか、嘉代子さんが仕事をしていた所だけが崩れてしまいました。次の日から嘉代子さんの捜索が始まりますが、崩れていることもあり見つかる気配はありませんでした。そこで両親は、明日で最後にしよう、と話していました。そして翌日、防空頭巾を被り白骨化した上半身だけの嘉代子さんが見つかります。そ

20 × 20

して、このことを忘れないうほしいと願いを
込めて嘉代子さんの大好きな桜を城山小学校
に贈呈したとうです。一般的な桜の寿命は約
60年といわれっていますが、この桜は戦後か
らず、と毎年春になるときれいに咲くとう
です。私はこの話をきいて、とても感動しまし
た。なぜなら、家族との絆と桜の寿命がとて
もすごいなと感じたからです。

私はこの長崎派遣で、原爆の悲惨さ、生命
の尊さ、話し合うことの大切さ、平和式典に
参加する貴重な経験などたくさんを学
んで実感することができました。

派遣後の活動について

・令和6年9月28日（土）松戸市戦没者追悼式



〈第二中学校 鈴木 瑠那〉



〈専修大学松戸中学校 本田 彩佳〉



市ホームページ(松戸市戦没者追悼式)QRコード

※学校から提供いただいた資料の一部を載せています

・学校での発表

栗ヶ沢中学校 山口 そよ香
令和6年9月2日（月）始業式で全校発表

金ヶ作中学校 松本 想来
令和6年9月13日（金）
活動報告会で発表（全校生徒、
特別支援学校の生徒及び引率職員、
保護者、地域の方が参観）



第六中学校 木村 花音
令和6年9月26日（木）オンラインで全校発表

牧野原中学校 山田 彩羽
令和6年10月4日（金）文化祭で発表

和名ヶ谷中学校 大谷 莉愛
令和6年10月10日（木）
クラスで発表



河原塚中学校 武井 優衣
令和6年10月11日（金）
全校集会で発表



光英VERITAS中学校 村瀬 麗奈美・吉澤 一真

令和6年10月23日(水) 全校集会で発表



第四中学校 岩淵 蒼生・鈴木 美羽

令和6年11月9日(土) 土曜参観(オンライン)で発表

第三中学校 梶本 大智

令和6年11月13日(水)

生徒集会(リモート)で発表



古ヶ崎中学校 三宮 春馬
令和6年11月26日(火)
学年集会で発表



長崎平和宣言

以下、長崎市ホームページから抜粋

長崎平和宣言

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め 眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った 原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家 財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から起ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ“原子病”の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは 23 歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から 79 年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！
今こそ ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて 真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと思いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに険しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年5月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024年（令和6年）8月9日

長崎市長 鈴木 史朗

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

ことばの解説

1. 福田 須磨子

1945（昭和20）年23歳の時、爆心地から約1.8km地点の長崎師範学校（現・文教町）で被爆。

原爆で両親と姉を亡くし、自身も紅斑症などの後障害に苦しみながら、被爆者の苦しみや戦争の悲惨さ、平和への思いについて詩やエッセーを通じて訴え続けました。著書に「われなお生きてあり」、「ひとりごと」があります。1974（昭和49）年4月死去。



福田須磨子詩碑（長崎市平和公園）

2. 放射線による影響

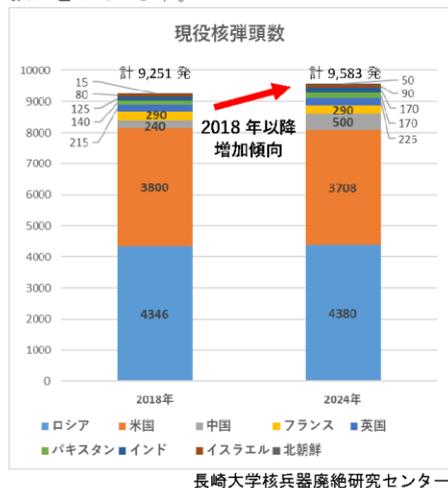
原爆による被害の特質は、大量破壊、大量殺りくが瞬時に、かつ無差別に引き起こされること、放射線による障害がその後も長期間にわたり人々を苦しめることにあります。

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びた時に出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの方が死亡しました。後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。1946（昭和21）年初めから、やけどが治ったあとに盛り上がるケロイドという症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れなくても小頭症などの症状が現れることがありました。さらに、1950（昭和25）年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発症率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

3. 核戦力の増強

核爆発を起こす部分（核弾頭）と、それを搭載するミサイルなどを組み合わせたものを核兵器と呼びます。核弾頭には、いつでも使える状態にある「配備弾頭」、配備に備えて貯蔵されている「予備弾頭」、老朽化などにより不要となった「退役・解体待ち弾頭」の3種類があります。核弾頭の総数は冷戦後一貫して減少傾向にありますが、配備弾頭と予備弾頭の合計である「現役核弾頭数」は2018（平成30）年以降増加傾向にあります。2024（令和6）年現在、ロシア、米国、中国、フランス、英国、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮の9か国が合計9,583発もの現役核弾頭を保有しており、そのうち米国とロシアが全体の約8割を保有しているといわれています。核兵器の問題は「数」だけではありません。核保有国は老朽化した核兵器を最新のものに更新する「近代化計画」を進めており、「質」の面でも核戦力の増強が進んでいます。



4. 核の傘の下にいる国

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）に加盟する非核保有国は、いずれも核兵器は保

有していませんが、アメリカの持つ核兵器の抑止力に依存しています。これらの国々を核の傘の下にいる国と呼んでいます。

これに対し、核兵器の抑止力に頼らない方法で国の安全を保障しようとする考え方もあります。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯構想（6で解説）を提唱しています。

5. 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかない甚大な被害を人間や環境に与えます。それは戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。核不拡散条約（NPT）で約束された核軍縮が進まない状況に不満を持つ国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010（平成22）年頃から強まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のもと、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催などを経て、2017（平成29）年7月、国連加盟国の6割を超える122か国・地域が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。条約の前文には「被爆者の苦しみと被害を深く心に留める」とあります。被爆者の「私たちの経験を、もう、誰にもさせたくない」という願いを国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の議会等が国内法にしたがって条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」といいます。

2020（令和2）年10月24日、批准した国が発効要件の50か国に達し、その90日後の2021（令和3）年1月22日に発効（国際法として効力を持つこと）しました。

なお、条約は締約国（条約に正式に入った国）らが話し合う会議を定期的開催することを

定めています。第1回締約国会議は2022（令和4）年6月にオーストリア・ウィーン市で開催され、核兵器廃絶への決意を示す「宣言」と、条約の実現に向けた「行動計画」が採択されました。第2回締約国会議は2023（令和5）年に開催され、第3回締約国会議は2025（令和7）年3月に開催される予定です。（ともに、ニューヨーク市の国連本部）

6. 北東アジア非核兵器地帯構想

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。

条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核兵器を開発・保有する動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によりすでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効しています。

「北東アジア非核兵器地帯」には、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものなどがあります。

条約が実効力を持つためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核兵器国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で威嚇や攻撃をしないと約束することが必要になります。

「朝鮮半島の完全な非核化」が明記された2018（平成30）年の米朝共同声明などを活かしつつ、地域国間の信頼醸成を図り、北東アジア全体の平和を実現するために日本政府が果たすべき役割は大きいといえます。

北東アジア非核兵器地帯構想



[世界の非核兵器地帯はこちら](#)

7. 地球市民

現在の国際社会には、国境を越えて全世界で取り組まなければならない問題が多く存在しています。

地球市民とは、人種、国籍、思想、歴史、文化、宗教などの「違いを乗り越え、誰もがその背景によらず、人として尊重される社会の実現」を目指して活動する人々を示す造語です。地球市民は市民としての帰属を国家ではなくより広い概念に求めています。

このように同じ地球に住む市民という考えに立ち、すべての人々の生活の向上を目指していくことが大切になっています。

8. 持続可能な開発目標（SDGs）

SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）は、「誰一人取り残さない（leave no one behind）」持続可能でよりよい社会の実現を目指す世界共通の目標です。2015（平成27）年の国連サミットにおいて、すべての加盟国が合意した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中で掲げられました。

貧困や飢餓などのいまだに解決が難しい問題、資源やエネルギーの有効活用、地球環境や気候変動などの地球規模で取り組むべき問題や、平和で平等な社会の実現など17のゴールを定め、2030（令和12）年までの問題解決を目標としています。

9. ワン・ヤング・ワールド

ワン・ヤング・ワールド（OYW）は、世界190か国以上から2,000人以上の次世代リーダー達が集まる世界最大級の国際プラットフォームで、若者版ダボス会議と呼ばれています。2010（平成22）年以来毎年、様々な国で開催されており、気候変動から紛争解決まで、地球の未来に関する課題について議論が行われます。

2024（令和6）年5月に、OYWの平和をテーマとした分科会である「ピース・プレナー・フォーラム」が初めて長崎で開催されました。

なお、ダボス会議とは、経済界のリーダー達が毎年スイス東部のダボスで議論する世界経済フォーラム（WEF）の年次総会です。

10. 平和の文化

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）が提唱した平和を構築するための考え方のひとつです。その理念は、ユネスコ憲章の前文に「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と明記されています。

世界には多様な文化や生活様式などがあります。こうした違いが分断を生み、それを力で解決する「戦争の文化」ではなく、相手の立場に立って話し合ったり交流したりしながら、お互いの理解を深め、信頼を築いていく「平和の文化」を育てることが大切です。



平和の文化

長崎市平和の文化
ロゴマーク

歴代平和大使名簿



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十年度 (二〇〇八年)	1	熊川 実旺	(第四中 2年)
	2	別宮 賢治	(第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと	(六美中 3年)
	4	片野 結依	(小金南中 1年)
	5	清水 のどか	(古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃	(新松戸南中 2年)
	7	清水 健人	(金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈	(新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実	(旭町中 3年)
	10	黒木 若葉	(聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度 (二〇〇九年)	1	川本 景介	(第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里	(第二中 1年)
	3	小幡 祐太	(第三中 1年)
	4	山田 政明	(第四中 1年)
	5	清水 彬奈	(第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子	(第六中 1年)
	7	増野 友梨奈	(小金中 2年)
	8	井山 陽菜	(常盤平中 2年)
	9	小林 美幸	(栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮	(六美中 1年)
	11	高島 里夏	(牧野原中 3年)
	12	西 志穂	(河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人	(根木内中 1年)
	14	四家 明宜	(金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華	(和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十二年度 (二〇一〇年)	1	櫻井 和奏	(第一中 2年)
	2	吉田 彩乃	(第二中 1年)
	3	三橋 若奈	(第三中 1年)
	4	笹本 幸輝	(第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉	(第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美	(第六中 1年)
	7	神部 ちひろ	(小金中 2年)
	8	田中 萌加	(常盤平中 1年)
	9	高梨 望	(栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士	(六美中 2年)
	11	大山 祭	(小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣	(古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹	(牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人	(根木内中 1年)
	15	富永 由也	(河原塚中 1年)
	16	石井 拓海	(新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志	(金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子	(和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ	(旭町中 2年)
	20	新倉 花菜	(小金北中 1年)
	21	田村 陽香	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子	(専修大学松戸中 1年)



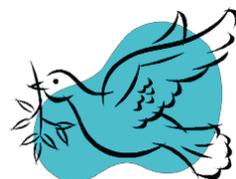
年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加	(第一中 2年)
	2	発地 空介	(第三中 1年)
	3	岸 健太	(第四中 1年)
	4	宗像 未来	(第五中 1年)
	5	天野 七海	(第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒	(小金中 2年)
	7	井山 祥樹	(常盤平中 2年)
	8	加藤 円来	(栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子	(六実中 3年)
	10	坂本 実優	(小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美	(古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子	(牧野原中 2年)
	13	山田 真平	(河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太	(新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来	(金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友	(旭町中 3年)
	17	板倉 日向子	(小金北中 1年)
	18	張 敏	(聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆	(専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大	(第一中 2年)
	2	茂出来 美樹	(第二中 3年)
	3	小澤 美羅	(第三中 3年)
	4	笠原 卓斗	(第四中 1年)
	5	播磨 渚生	(第五中 3年)
	6	内海 渚	(第六中 1年)
	7	大津 みちる	(小金中 3年)
	8	小俣 さやか	(常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香	(常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美	(六実中 1年)
	11	宮本 龍一	(小金南中 3年)
	12	樋口 杏	(古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ	(牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽	(根木内中 2年)
	15	後藤 陽	(河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩	(新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき	(和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢	(和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗	(旭町中 1年)
	20	川村 香奈美	(小金北中 1年)
	21	石井 そら	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎	(専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈	(第一中 1年)
	2	河野 圭吾	(第二中 1年)
	3	福田 友郁	(第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮	(第四中 1年)
	5	宮島 健吾	(第五中 3年)
	6	後藤 美菜	(第六中 3年)
	7	関川 美海	(小金中 2年)
	8	金澤 春樹	(小金中 1年)
	9	阿部 雅治	(常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀	(栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗	(六実中 1年)
	12	島田 悠	(小金南中 1年)
	13	大久保 愛深	(古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子	(古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正	(牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗	(牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗	(河原塚中 3年)
	18	平野 茜	(新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司	(和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真	(小金北中 1年)
	21	郡司 萌	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大	(第一中 2年)
	2	白井 悠生	(第二中 2年)
	3	松本 優樹	(第二中 2年)
	4	本間 宏明	(第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗	(第四中 3年)
	6	宮島 加奈子	(第五中 1年)
	7	植田 聖杜	(第六中 2年)
	8	合田 健太郎	(小金中 2年)
	9	早崎 諒	(常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠冴子	(栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣	(六実中 3年)
	12	片野 玲奈	(小金南中 1年)
	13	和田 晴人	(古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介	(牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎	(根木内中 2年)
	16	樋口 明日香	(河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀	(新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲	(和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜	(旭町中 1年)
	20	渡邊 龍	(小金北中 1年)
	21	野中 利悦	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子	(専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十七年 度(二〇一五年)	1	服部 叶汰	(第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平	(第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢	(第三中 2年)
	4	朝生 蘭	(第四中 1年)
	5	田島 歩夢	(第四中 3年)
	6	佐藤 駿太	(第五中 1年)
	7	小林 優人	(第六中 2年)
	8	山下 優月	(第六中 2年)
	9	田崎 和	(常盤平中 1年)
	10	須藤 巧	(小金南中 1年)
	11	萩原 真央	(小金南中 1年)
	12	大久保 敦康	(古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか	(古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也	(牧野原中 2年)
	15	木村 史来	(牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆	(河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋	(和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来	(旭町中 2年)
	19	島岡 里帆	(小金北中 1年)
	20	藤井 友紀	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十八年 度(二〇一六年)	1	梶原 望音	(第一中 1年)
	2	新井 しほり	(第二中 2年)
	3	山本 遥香	(第三中 2年)
	4	大住 春紀	(第四中 1年)
	5	埴 悠莉乃	(第五中 1年)
	6	三橋 世那	(第六中 1年)
	7	山崎 夏海	(小金中 2年)
	8	千葉 京香	(常盤平中 1年)
	9	須藤 未来	(小金南中 1年)
	10	坂本 聖	(小金南中 2年)
	11	相馬 結子	(古ヶ崎中 1年)
	12	中村 莉子	(古ヶ崎中 1年)
	13	水谷 寛樹	(牧野原中 1年)
	14	工藤 翼	(根木内中 1年)
	15	長田 結	(根木内中 2年)
	16	吉田 香凜	(河原塚中 1年)
	17	板橋 来美	(新松戸南中 1年)
	18	中川 和泉	(金ヶ作中 1年)
	19	本田 真樹	(和名ヶ谷中 2年)
	20	羽坂 美柚	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	白石 優美香	(専修大学松戸中 1年)
	22	星名 優歩	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十九年 度(二〇一七年)	1	高橋 聖奈	(第一中 2年)
	2	中木 源	(第二中 3年)
	3	見城 希音	(第三中 1年)
	4	角田 結菜	(第四中 1年)
	5	旗谷 優衣	(第四中 1年)
	6	伊藤 姫那	(第五中 1年)
	7	西田 翼	(第六中 1年)
	8	岡村 タイニー 美波	(小金中 1年)
	9	橋本 尚紀	(小金中 3年)
	10	小池 彩華	(常盤平中 2年)
	11	林 隆正	(栗ヶ沢中 1年)
	12	永野 礼華	(小金南中 2年)
	13	村田 和航	(古ヶ崎中 3年)
	14	榎田 朱里	(牧野原中 1年)
	15	北山 風香	(河原塚中 1年)
	16	スッティブン 凜	(河原塚中 1年)
	17	戸田 美智華	(新松戸南中 1年)
	18	田中 みなみ	(金ヶ作中 1年)
	19	佐藤 古都	(和名ヶ谷中 2年)
	20	松本 歌子	(和名ヶ谷中 2年)
	21	中村 葵	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	堀越 菜々	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成三十年 度(二〇一八年)	1	並木 康輔	(第一中 1年)
	2	藤井 拓真	(第二中 2年)
	3	織田 舞衣子	(第三中 1年)
	4	安藤 聡真	(第四中 2年)
	5	林田 唯雫	(第五中 2年)
	6	南畝 亜美	(第五中 3年)
	7	高橋 ヒカル	(第六中 2年)
	8	國崎 沙和子	(小金中 2年)
	9	犬尾 まり花	(常盤平中 1年)
	10	佐瀬 綾乃	(六実中 1年)
	11	堀本 大雅	(小金南中 1年)
	12	大木 悠広	(小金南中 3年)
	13	堀越 春生	(古ヶ崎中 1年)
	14	北原 早春香	(根木内中 1年)
	15	平 水音	(河原塚中 2年)
	16	藤田 隆良	(新松戸南中 2年)
	17	小山 杏奈	(金ヶ作中 1年)
	18	森田 和佳奈	(金ヶ作中 1年)
	19	飛田 美紅	(和名ヶ谷中 1年)
	20	島岡 凜	(小金北中 1年)
	21	富田 愛夢	(小金北中 3年)
	22	関野 七海	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
令和元年度 (二〇一九年)	1	藤井 星空	(第一中 3年)
	2	新井 はるの	(第二中 3年)
	3	小川 ひなた	(第三中 2年)
	4	小島 未来	(第四中 3年)
	5	福士 莉奈	(第五中 3年)
	6	齊藤 光咲	(第六中 1年)
	7	小林 大起	(小金中 2年)
	8	小川 新九朗	(栗ヶ沢中 1年)
	9	肥田 友稀	(六実中 1年)
	10	瀬川 千寛	(小金南中 3年)
	11	相馬 理子	(古ヶ崎中 1年)
	12	高橋 柚希乃	(古ヶ崎中 2年)
	13	猪瀬 響樹	(牧野原中 3年)
	14	澁谷 亜依	(根木内中 1年)
	15	蒔野 拓朗	(河原塚中 3年)
	16	佐藤 達弥	(新松戸南中 2年)
	17	清水 啓乃介	(金ヶ作中 1年)
	18	松本 虎太郎	(和名ヶ谷中 2年)
	19	小川 陽翔	(旭町中 1年)
	20	八木原 弓賀	(小金北中 2年)
	21	西川 叶美	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	江本 彩乃	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和4年度 (二〇二二年)	1	田中 雅	(第一中 3年)
	2	松本 大和	(第二中 2年)
	3	高橋 拓実	(第三中 1年)
	4	西山 みなみ	(第四中 2年)
	5	武田 真央	(第五中 1年)
	6	紅田 純怜	(第六中 1年)
	7	國崎 美和子	(小金中 3年)
	8	福井 健人	(小金中 2年)
	9	臼井 絢音	(常盤平中 1年)
	10	山口 侑馬	(栗ヶ沢中 1年)
	11	佐瀬 怜奈	(六実中 2年)
	12	阿部 尚平	(小金南中 2年)
	13	中山 香乃	(古ヶ崎中 1年)
	14	岩田 大和	(牧野原中 3年)
	15	依田 千尋	(河原塚中 2年)
	16	武 茉友花	(河原塚中 3年)
	17	岡田 隼	(金ヶ作中 3年)
	18	山岡 友梨子	(金ヶ作中 1年)
	19	藤原 穂華	(和名ヶ谷中 2年)
	20	佐藤 一翔	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和5年度 (二〇二三年)	1	佐方 知樹	(第一中 1年)
	2	須志原 理奈	(第二中 2年)
	3	七條 圭都	(第三中 3年)
	4	千葉 皇毅	(第四中 1年)
	5	清水 優輝	(第五中 1年)
	6	金谷 直佳	(第六中 1年)
	7	中澤 莉沙	(第六中 1年)
	8	河村 榛己	(小金中 1年)
	9	玉木 隆太	(常盤平中 1年)
	10	平山 優奈	(栗ヶ沢中 2年)
	11	大谷 倫子	(六実中 1年)
	12	高橋 凜	(小金南中 2年)
	13	高橋 由佳梨	(古ヶ崎中 2年)
	14	吉田 心美	(河原塚中 1年)
	15	宇戸谷 茉瑚	(新松戸南中 3年)
	16	越智 海成	(金ヶ作中 3年)
	17	藤川 真莉花	(和名ヶ谷中 2年)
	18	佐藤 衿花	(和名ヶ谷中 2年)
	19	倉品 詩月	(旭町中学校 1年)
	20	本田 真理	(小金北中 1年)
	21	田嶋 孔賀	(光英 VERITAS 中 2年)
	22	小口 莉子	(専修大学松戸中 1年)





令和6年度
平和大使長崎派遣事業
報告書

争いのない世界へ
未来を担う私たちが
「平和」という橋をかけよう

松戸市
総務部総務課

令和6年12月発行